

経営学部が懐かしい



京都産業大学名誉教授 ヴルピッタ ロマノ

今は分からないけれども、少なくとも私が現役だった限り、経営学部は京都産業大学の顔であった。これは、経営学部がより優れた学部であったという意味ではない。他学部にはより優れた先生がいたであろうし、あるいはより優れた研究が行われ、あるいはマス・コミでもっと賑わっただろうが、京都産業大学と言うと、「経営学部」が浮かんできたのは確実である。特に京都では、就職の関係で連想されたのではないか。やはり、経営学部の就職率は高かった。京都産業大学の卒業生はすぐに戦闘力になるとは企業の評判であったが、特に経営学部の教育は実務的で評価されていた。また、教員たちの活動は地域に密着していて、色々と地域開発に貢献していた。しかし、それよりも、もっと根本的な理由もあったのではないかと思う。「産業」大学である以上、「経営」は産業に欠かせないものである。この観点からも経営学部は大学の顔であった。建学の精神は国に役立つ人材を育てるというのであれば、経営学部はこの理想にもっとも叶った学部ではないのであろうか。とにかく、私を感じた限り、教員たちはその使命感を意識し、地味でありながら「神山の精神」を感じていた。「神山の精神」とはややこしい思想ではなく、「地味に」学生に尽くし、社会に尽くすことである。

私が京都産業大学に入ったのは昭和50年代の半ばであった。その時、大学の雰囲気は未だ創立の時代とあまり変わらなかった。黒ずんだコンクリートの建物はあまり美しくなく、かえって何とか憂鬱な感じだったが、それでも一種の格調があった。「これは日本の教育の場」と感じられた。イタリアの大学生に比較したら、産大の学生は子供っぽく見えた。男性の多くは学生服を着ていた。外語学部以外、女学生は少なかった。教員も男性は多かった。経営学部で長い間、女性の教員は筒井先生ただ一人しかいなかった。あと一人が登場したのは、ベルリンの壁が崩壊してから数年後であった。それは女性が軽視されたためではなかった。かえって、筒井先生は学部長になった。ただ、あの時代に経営というのは男性の畑と思われたからである。しかし、新世紀になると、いよいよ女性教員は増えてきた。女学生も同じ。どんどん増えてきて、学部に活気をもたらした。やはり、平均的に見ると、男性よりも積極的であるから。

大学そのものも次第に変わってきた。古びた建物が改築され、新しい建物もできた。学部も増えてきた。キャンパスは賑やかになった。学生はもっと大人っぽくなり、服装もファッションナブルになっ

た。在職の三十一年間、大学が日本の社会とともに変わってゆくのを私は見つめてきた。

私のことになるが、経営学部の中、ある意味で異質の者であった。私は元々、経営学と関係がなかった。大学で最初の五年間は教養部で「西洋人から見た日本文化」と「ヨーロッパ共同体」を担当していた。但し、六年目の途中、大学の都合で経営学部に移動となった。臨時措置で、教養部に帰る予定だったが、実際、経営学部は居心地がよかった。当時の学部長の柳原先生も私を快く迎えて、「ヨーロッパ共同体」を経営学部により相応しい「ヨーロッパ企業論」に変名して、経営学部に残ることになった。しかし、変名だけですまないで、内容も調整する必要があった。この点で、はっきり言うと、苦戦した。一般教養科目の「西洋人から見た日本文化」は人気があったのに、専門科目は当初あまり人気がなかった。でも、色々工夫して学生のニーズに応えるようになり、ついにそれなりの人気が出た。

反面、経営学部で教える者として、イタリアで日本的経営の専門家と見做され、産業界で講演、大学で集中講義を依頼されるようになった。一度、私の紹介で柳原先生はイタリア東北部の4か所の地方産業連盟とローマ商工会議所で講演をなさるようになった。私は同行して、通訳をした。大成功だった。しかし、最後の講演会から遠く離れたミラノ空港へ行くにはレンタカーが提供された。私が運転することになったが、フランス製の車で独特のギヤーがあり、バックが中々入らなかった。そうすると、バックのとき二人で車を押すことになり、先生に大変な迷惑をかけた。ミラノ空港で先生を送ってから、急にバックの入れ方が分かったというエピソードもあった。

今、経営学部は学科体制を導入で大変身し、新しい時代のニーズに応じて益々発展しているが、私には、年のせいか、昔の雰囲気懐かしい。